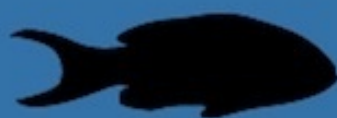




龍宮の御伽の泉



望月 俊弘



龍宮の御伽の泉

龍宮の御伽の泉

望月俊弘

海の龍宮から河の龍宮へと使いに出ていた帰りだった。おしゃべりなカメのマンネンは、大事件を目撃する運命となった。

龍神の息子にしてハンサムな海の王子の海太郎と強大な力量の海の魔女のシーサラ。この二人が浅瀬で何か言い争ってもめている所でした。

「うわあ！ こりゃあ大変だ！ 魔女のシーサラと拘わったら不吉な事が起こるだけだ。絶対に」

マンネンは海草に身を隠し、恐々と様子を見まもるしかなかった。

「さあ、海太郎あたいと婚約するのですがなっ」シーサラが精一杯の茶目っ気を出そうとして引きつったダミ声でそう言いました。

「でも、それは駄目だ。それにもうすぐ姫が生まれるから」

「けっ！」急に怖気のする声音となった。「ああ、ああ、例の乙姫の話かい？ それじゃあ、折角だから誕生祝いに気の効いたもの、そう、呪いの魔法でもサプライズしてやろうかしらね」シーサラの大きな口が、ニイツと吊り上って意地悪そうに笑います。

「駄目だ！ 止めるんだ。お願いだよ!!」海太郎は、両手のコブシを振り下ろして叫びました。

「ふんっ。――じゃあ、乙姫の代役に、わたしを拒んだお前に呪いの魔法を味わってもらうがな」

マンネンは、あまりの怖ろしさに手足がぶるっぶるっと震えました。すると、少し前に泳いでしまい、慌ててワカメの中に戻りました。

「これは仕方ないのか。姫には手を出さないと約束してくれ」

「潔いんだな。乙姫の件はもういいだろう。それより、お前の身体を心配するんだな」シーサラが、大袈裟な身振りをして杖を振り翳します。「海太郎よ。海の中では魚となりて、陸においては醜き化物となれ」変化の杖の紫色の毒々しい光線を受けると、海太郎は白い魚となってしまいました。

「こっこれは？ 魚だ！ 魚になってる。それに大きい……」

「魚になった感嘆も今の内だわい。まあ、魚は海の民だからなー。そら、陸へ上ってみるがよい」

数秒後に醜いのは分ってはいたが、海太郎はぶっ魂消る。水面に映る自分には面影すらなかった。

「何んてこった。いよいよこれじゃあ誰も僕だって判らないよ。人の形しているのに。ああっ、俺は、もう、駄目だあ一つ」

涙をこらえられない。

「教えておこう。あたいはこれでもロマンチストでな。愛する人の心からのキスをうければお前の呪いは解ける。ただし、自分の方から愛を告白すると心臓は止まってしまう。切ないのう」

そこまで聞いたマンネンは、龍宮城へと飛ばしに飛ばして帰りました。

「これは大変な事になりまんねん！」

パニックしたマンネンを見つめて龍神は言います。

「河の龍宮はよろこんでくれたか？なにをあわてているんじゃ」

「そうでんねん、いや、それがちやいまんねん、えらい大変でんねん」

マンネンは自分の見たこと聞いたことを龍神に伝えました。

「何んと！ 可哀相な海太郎よのう。東の海の神たるわしでさえもシーサラの呪いはとけぬのじゃ。一人ぼっちの海太郎」

「ええ。龍神さま」マンネンも同じ気持ちで頷きました。

「龍宮が唯一の拠り所なんじゃ。いづれやってこよう。マンネンよ。気持ちを汲み取ってやるんだぞ」

「ええ、こちらからは海太郎の名は伏せて置きましょう」

海太郎は、泣きたい気持ちでひたすら泳ぎました。絶望に頭を抱えたくても、ヒレでは叶いません。そのうち魚として泳ぐのにも慣れてきました。

銀色の細長い体に赤いライオンのようなたてがみ。赤い腹ビレは長く、体の上部は人が乗れそうなボートのような形をしていた。顎から二本の長い触角がある。

気がつくとも魚は、龍宮への海流にのっていました。秘密の出入口の外は深海なので暗くて寒くて締め付けられる世界でありました。だからへんてこな生物しか生きてゆけないのでしょうか。中庭に続く道の始まる門を潜ると主立った明かりは、二メートル間隔の籠に入った提灯アンコウとなった。変わり果てた魚には彼らの視線でさえ気になります。色んな色でぼおっと光っているだけなのはいつも通りです。魚はさらに泳ぎ進みました。城門は赤いサンゴで構築されています。中はだだっぴろい仕様です。城門を潜ると、呼吸の感覚が変わります。大袈裟に言えば、ゼリーを吸って、体の中の不純物をそのゼリーに混ぜて吐くような感じでした。慣れてしまえばなんてことはありません。直に五階建ての豪壮な塔に目を引かれました。

「ああ、ドッキンドッキンしてきた。僕が海太郎だって知れたら皆どう思うかなあ」自分の言葉が楽天的なりズムの歌声になったので、龍宮に帰ってきたのだなあと改めて気付かされました。

「仕方無いんだ。全ては乙姫の為だった。別の生き方探さなきゃあー」

「もし……」と誰かが後ろから話かけてきました。

ビクツとして振り向くと、喋るカメのマンネンがおりました。

「さあ、中へ入りましょう。来なさい」

階段は無く三階の部屋に父上である龍神がいました。

魚は、散々考えた末の言葉を伝えようと一生懸命でした。

「急な話ですが、ぼ、いや私を龍宮の使いとして、こ、ここにお、おいてく、くだ、くだ……
さい。なんでも、なんでもします……」

息子が元々自分の家だった所にいさせてくれとみっともない位涙を流し、声を詰まらせ懇願する姿を観た龍神も、流石に涙をこらえるのに困りました。

「そなた言葉が使えるじゃないか。訳ありか？」とは言えませんでした。

「マンネンに仕事を教わりなさい。君を今から『リュウグウノツカイ』と呼ぼう。一階を使いなさい、リュウグウノツカイよ」と言って背を向けました。一階は海太郎が暮らしていた部屋なのです。気持ちは複雑です。

〈海太郎なんてもう帰る場所も無いんだ〉

乙姫は大きな大きな真珠貝の中で、本来は海太郎の許婚として、生まれるのを待たれていました。

そして時が熟すと、貝がわずかずつ開き、中で眠っていたのは、不思議な赤ちゃんでした。歩けるし、喋れるし、肌も真珠のような色なので赤ん坊と呼ぶのも変な位なのでした。

その日は、龍宮を上げての誕生祭が開かれました。

乙姫の拙い会礼の次は、いよいよ海の生物達のダンスミュージカルが始まります。

照明は、提灯アンコウとその明かりにきらめくネオンテトラ。ホタルイカが光を放ちながらクロスすること数千回。タツノオトシゴが択山集まってトランペット隊。カニがカメの甲羅をリズムカルに叩く。高音はイルカが、低音はマッコウクジラが歌い、タコやタイやヒラメが楽しそうに踊っています。

どんな指揮をとろうが、滅茶苦茶に楽器をあつかおうが、海の生物達はそれにうまーく合わせてくれる。歌っても然りです。

乙姫は龍神が造った琴のような楽器を奏で、歌ってみました。

歌も楽器もバッチリ完璧でした。しかし、ここが龍宮でなかったら、誰もが子指で耳を塞がずには在られなかったでしょう。

乙姫は、もう龍宮の虜です。

耳をかたむけると聞こえてくる不思議な音色。まだ初めて耳に聞こえる音も多い。青や緑のサンゴの木の果実は常に新しい味で、とても美味しい。個性的な庭が様々に択山の神殿をぐるり。本殿の四階には、御伽の泉があります。

「まあ、なんて素晴らしい」

御伽話を映し出す泉です。いつも龍神と一緒にという約束で、乙姫は、驚き、笑い、感動して楽しみました。「浦島太郎」の乙姫を見て一言。「随分オバンね」

ある時、乙姫はリュウグウノツカイに言いました。

「私生まれてきてホントに良かった」

魚になった海太郎は、乙姫と一緒に世界中の海を冒険して廻りました。乙姫は、リュウグウノツカイの首に両手を回し、時々、耳におどろきの言葉を伝えました。

「ねえリュウちゃん、私の事好き？」何度も何度も――。

「姫の方はどうなんですか？」私は告白すると心臓が……。

「ひーみつ」この繰り返しでした。

乙姫が手を翳すと色鮮かな魚たちはたわむれる。かまってもらおうとする。乙姫は歌う。舞う。笑う。年を取るごとにそれも洗練されたが、乙姫は、なにからなにまで愛らしかったのです。何時かあの桃太郎に恋するまでは。

夜な夜なすすり泣きが、本殿の二階から漏れ聞えるようになりました。

そんな事が続いたある日、夜遅くに目覚めたリュウグウノツカイはいよいよ心配が募りとうとう見に行く事にしました。

大きな真珠貝のねどこが開いていました。

生きる真珠、乙姫の眼からは真珠の涙が落ちます。大きな貝の寝床には大粒の真珠で一杯でした。

なぜ泣いているのか問うと「私、生まれなきゃ良かった」と乙姫は言いました。「だってあの桃太郎様はどこかの姫と何時までも一緒に暮らすの。だから胸が苦しくてたまらないの！リュウちゃんどうすれば善いの？」

「恋患い？……どうにも困りました。なんとかするには、まず行動を起こさなければ！そうだ、御伽の泉に入っちゃいましょうよ」

「えっ？ 御伽の泉って入ることもできるんですか」はつきりとした希望をその声からは見つけ出せました。

「よく聞いて下さい。御伽の泉はタイムマシンのようだとも言えます。御伽噺の中ならば、何時にでも、何処へでも入ることが出来ます。是を使って『桃太郎』に出てくる姫を乙姫様と擦り替えるのが私達の作戦です。勿論囚われていた姫は私が背中に乗せて陸まで届けて差し挙げます。一番困るのは、その『御伽噺』の『お噺』が大きく変わってしまうことです。そうなったら空は罅割れ、海は荒れ狂い、大地は砕けます。勿論私達も只では済まされません。だから今まで乙姫様は一人で泉を観る事が許されなかったのです」リュウグウノツカイは魚なりに厳しい表情と声音をした心算で続けました。「まず、第一関門は、許してくれるはずの無い龍神の隙をつくことです。龍神は必ず三階で昼寝をします。夜は泉を観れないので、この間をつくしか無さそうです。宜しいですか？」

「うん。判かった。リュウちゃん有り難う。でも悲しいわね、もう……」

「そうですね。もう会うことはないでしょうね」リュウグウノツカイの方が敏感だったのかも知れません。

「私淋しい——リュウちゃんが人間だったらなあ……」

乙姫が瞬きすると、ポロリと大きな真珠が落ちました。水分を含んでいました。

そして、一人と一匹は、龍神の昼寝の隙をつき、今いよいよ御伽の泉を目前としてとどろきました。

「桃太郎」のディスクをセットします。

そして「桃太郎」を普通に観ています。鬼が島へ桃太郎達が舟で乗り込んで来る場面まで来て、リュウグウノツカイは、ヒゲで場面転換の操作をします。泉を鬼が島の裏の、壁の様に切り立った崖の下に合わせました。帰りはここから寂しく帰るのです。龍神の怒りは覚悟の上です。乙姫の幸せの為に自分はこんな姿になったのではないか。

「それっ!!」

薄くて濡れない膜を潜って「桃太郎」の世界に入りました。

「キャッ！ 鬼！」乙姫は口に出してしまってから、それは言ってはならない言葉だったと悟りました。彼こそが真しくリュウちゃんなのです。他には誰もいないし傷付いた顔は鬼でも判かるのでした。乙姫の真珠色の顔が自分でも判かるほど真っ赤です。

「ほらほら赤鬼姫！ さっさと作戦に取りかかろうぜ」

陸では海太郎の言葉となります。

「そうね、まずは囚われの姫を助けなきゃ。それと……ゴメンねリュウちゃん」

二人共次の言葉が見付からないまま、道は御伽の泉のはるか上に出ました。

「おい！ お前らなにしてる」二本の角がある鬼から声が掛りました。

「御覧の通りだ」と言ってリュウグウノツカイは、踏ん張る二角鬼を崖の下に投げ落としてしまいました。右手で掴んでいた角が折れました。

その時、鬼の城から三人の鬼がこちらに歩いてくるのが視えました。

リュウグウノツカイがさっきの鬼からもげた角をすばやく頭にくっつける様に持ちました。

「こら、お前ら何やってんだ」鬼たちは、口を揃えて言いました。

「この女を逃がした奴を今やっつけました」」さすがに正面から三人もの鬼と戦うのは避けました。

「御苦労。姫を連れてゆく」鬼達は再び口を揃えました。これらの鬼は単純に出来てるようでした。

歩いて行くと、判り安い所に檻は在りました。「どういうことだ。姫はしっかりいるではないか」

再び同時に言いました。ところが内二人は後ろから頭を掴まれ、ゴツツンコされて呻びてしまう運命と成りました。

「なぜおまえらは、桃太郎との戦にいかないんだ？」残りの鬼に訊きました。

「そっその桃太郎かどうか分かんねえけど、日本一強い奴が来るってんで、しばらくボスは隠れてるんだ。それを誰からきいたかは知らねえ」

ならばそれでいいだろう。害がないんならな。さあ姫様、交代しなさい。もう恐くありませんよ」

どこぞの姫は、観るからにギクリとした顔をしてリュウグウノツカイを見据えています。

「いやよ。だってあんた鬼じゃろ。あたいがなにされるか知れないがな」

「んっ？」

「まあ！ 『んっ？』じゃないでしょ。あたいのなまり言葉がそんなに変じゃというんが」

「失礼しました。昔の知人と……。兎に角。さあ速く」

姫は、しばらく悩んでから「解かったわさ」と言いました。

かわりに乙姫が檻に入りました。

「寂しくなる」

「私、幸せになる」乙姫は泣きそうでした。ここまで尽くして呉れた者との別れです。

どうとうリュウグウノツカイは、陸に姫を届け、目的を達成しました。あとは、御伽の泉から龍宮へ帰るだけです。

「是で良かったんだ。でも日本一の桃太郎がやってくるのを知ってた奴が気になる」

実は海の魔女シーサラは、鬼のボスと取り引きしていました。

「もう少しすると、日本一強い男がやってくるんだわさ。だからどこぞの姫をずっと奥へ隠して、あたいを見付け安い檻に隠しなよ。あの人は、財宝よりも、囚われの姫を助ける為に来るんじゃないからな」

そして――

「ない！ 御伽の泉が消えた！ 何故？」

「鬼の一味に成るしかないなら死んだほうがましだ。よし！ 覚悟は決まった。せめてボス鬼だけでも倒してやろう」

早速先っき逃がしておいた鬼を掴まえて、秘密の隠れ場へ案内させました。

何故かボス鬼に乙姫が捕まった所でした。

「姫は一人しか檻に入らねえって訳だ」赤いボス鬼は大声で笑った。

「シーサラが魔法で飛んで来たのよ！」乙姫は大きな声で言った。「今頃は桃太郎様が、掛けつけてるかも!!」

「そうか！ でも、まずは鬼のボスだな。やい！ 乙姫を放してもらおうか……。しかしお前、力はあるそうだが、おつむはおバカそうだなあ」沁沁言いました。

「そういうこと言うやつがバカなんだ」

「じゃあ、どっちが速く足し算できるか勝負だ。五足す七は幾つだ？」

ボスが指を四つほど折り曲げている所を、何かが襲いました。

「隙あり!!」跳び跳ね回転右踵落とし。別名鬼首潰し。

ボス鬼の頭が、顎の高さまで肩に沈んでしまいました。

「答えは、お前の頭の中と同じで豆腐だよ。

十二」ボス鬼を倒しました。

「乙姫速く！」手を繋いで二人は走りました。最後には、引っ張るような形になってしまいました。「シーサラより早く桃太郎に出会わなければ!!」

二人は城の外へ飛び出しました。

そこへ、残りの鬼を斬り捨てた桃太郎が駆け付けました。

「こら、鬼!! 姫に乱暴な真似をするな！」

桃太郎は剣を構えました。

「違うの桃太郎様。この角は取れるのよ、ねっ！ あれ？」しかし乙姫の力では挽げません。

「姫、騙されてはいけません。こんな醜い人間などいるわけがないのです」桃太郎はリュウグウノツカイを斬りつけようとしています。

必至に止めようと体をいれる乙姫を、リュウグウノツカイが、激しく観えたのに、実は優しく押し退けました。死ぬ覚悟がありました。

「化け物め！」

ズバッ！

必殺の一撃をリュウグウノツカイは浴びました。

「お幸せに」と乙姫にだけ届くように言いながら、リュウグウノツカイはお尻から倒れ込みました。

「嫌ーっ!!」

乙姫は泣きすぎりました。乙姫に真珠の涙は氷のようなもので、熱く焦がれると溶けて聖なる水となる。「涙がこんなに熱いなんて」乙姫の涙は、ちょうどリュウグウノツカイの傷口に注ぎました。みるみる傷口が塞がれていきました。

「ああっ、傷は治った。でも、御伽の泉が消えて帰れない。言葉で伝えられなかった惨めな気持ち晴らす時だ。私は、乙姫、あなたを心から、あ……んっ」

ピトツと言葉を封じたのは、口唇でした。

すると、二人の膨らんだ頬から口唇の外へと漏れた七色の光が、四方八方へ迸りました。鬼達や海太郎の角が砂のようにさらっと潮風に解け、鬼達は人となり、海太郎は、また凜凜しい顔の青年と成りました。

――さて、御伽の泉に入った者は、表舞台の噺しを変えてはならぬ掟があるのですが……。

「さあ乙姫、そんなところで」と言った桃太郎に、乙姫は本当の事を話しました。でも今はそんな気になれないと。

「あたいがおるじゃないの」とシーサラの声があがりました。桃太郎が「ううむ」と唸りました。とてつもなく醜いのです。それでも、何回も、変化の杖が折れるまで綺麗にした姿でした。

そこに首の潰れた大男が現れて言いました。

「隠していた姫を連れて来たぞお」

皆なが盛り上がっていると、突然目の前に御伽の泉が出現しました。

「ほれ、桃太郎の凱旋シーンの船漕ぎ係の鬼じゃ」龍神の声がして見おぼえある鬼が出て来た。泉のある崖の下に投げ落としたもと二つ角鬼でした。……そうだったのか――。

「こいつが行き成り龍宮に入ってきた時には、ほんとびっくりしたわい。まあよい。海太郎に乙姫、早く龍宮へ戻ってまいれ。海を上げてのお祭りじゃ」

めでたし めでたし